菊川町埋蔵文化財調査報告書第47集

松ケ谷（まつがや）遺跡

1997

静岡県菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財調査報告書第47集

松ヶ谷遺跡

1997

静岡県菊川町教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査の経過および方法……2

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境……3

第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　層位……5
　第２節　遺構……5
　第３節　遺物……8

第Ⅳ章　まとめ……9

挿　図　目　次

第１図　位置図（１：2,500）……1
第２図　グリッド配置図……2
第３図　遺跡の位置と周辺遺跡（１：10,000）……4
第４図　土層図（調査区西壁）とＳＫ－１実測図……6
第５図　全体図……6
第６図　出土遺物（縄文土器、弥生土器、石器）……8

挿　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……4
第２表　遺物観察表……9

図　班　目　次

図版１　完掘状態
図版２　配石－１検出状態
ＳＫ－１、Ｐ－１・２完掘状態
出土遺物（縄文土器、弥生土器、石器）

報告書抄録

ふりがな 書名	まつがやいせきはっくつちょうさほうこくしょ 松ヶ谷遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	菊川町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	後藤和風
編集機関	菊川町教育委員会
所在地	〒439　静岡県小笠郡菊川町堀之内61　TEL 0537－35－0925
発行年月日	西暦　1997年2月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				㎡	
まつがやいせき 松ヶ谷遺跡	おがさぐんきくがわちょう 小笠郡菊川町 かんのお 神尾	22446	92	34度 44分 8秒	138度 06分 40秒	19960723 ～ 19960726	100㎡	農道開設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ヶ谷遺跡	集落跡	縄文	配石　4基	縄文土器 石器	
			土坑　1基	石器	
			柱穴・小穴　2基		
	散布地	弥生		弥生土器	

例　　言

1．本書は、静岡県菊川町神尾1487－11ほかに所在する松ケ谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査を行なうに至った原因は、周知の遺跡において農道開設工事が計画されたためである。調査に要した費用は、牧之原農業用水建設事務所が負担した。この委託契約は、「8畑総牧之原西部地区調査委託その66」である。

3．発掘調査（本調査）は、牧之原農業用水建設事務所長 近藤武典を委託者とし、これを請け菊川町教育委員会が実施した。期間は平成8年7月23日から7月26日で調査面積は100㎡である。

調査主体	菊川町教育委員会			
調 査 員	後藤　和風	塚本　和弘（菊川町教育委員会）		
作 業 員	杉山　花江	杉田　孝江	水島まさ江	堀内　初代
	福井　京子	丸尾　安代	井指　秋雄	高岡　三郎
	長谷山寅男	山川加知夫		
整理作業	吉野由喜子			

4．本書の執筆と編集は後藤和風が行なった。

5．遺物整理および実測図・挿図作成には松井由美子、神田清乃、斉藤京子、谷口孝子、萩原紀江の協力を得た。

6．遺構・遺物写真は、後藤が撮影した。

7．現地調査と本書発刊に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行なった。

教　育　長	鈴木静夫
事務局長兼課長	横山守孝
文化振興係係長	石川睦美
担　当　者	塚本和弘
	後藤和風
事　務　員	丸尾淳子
	青木正子
臨時事務員	西野洋子

8．実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

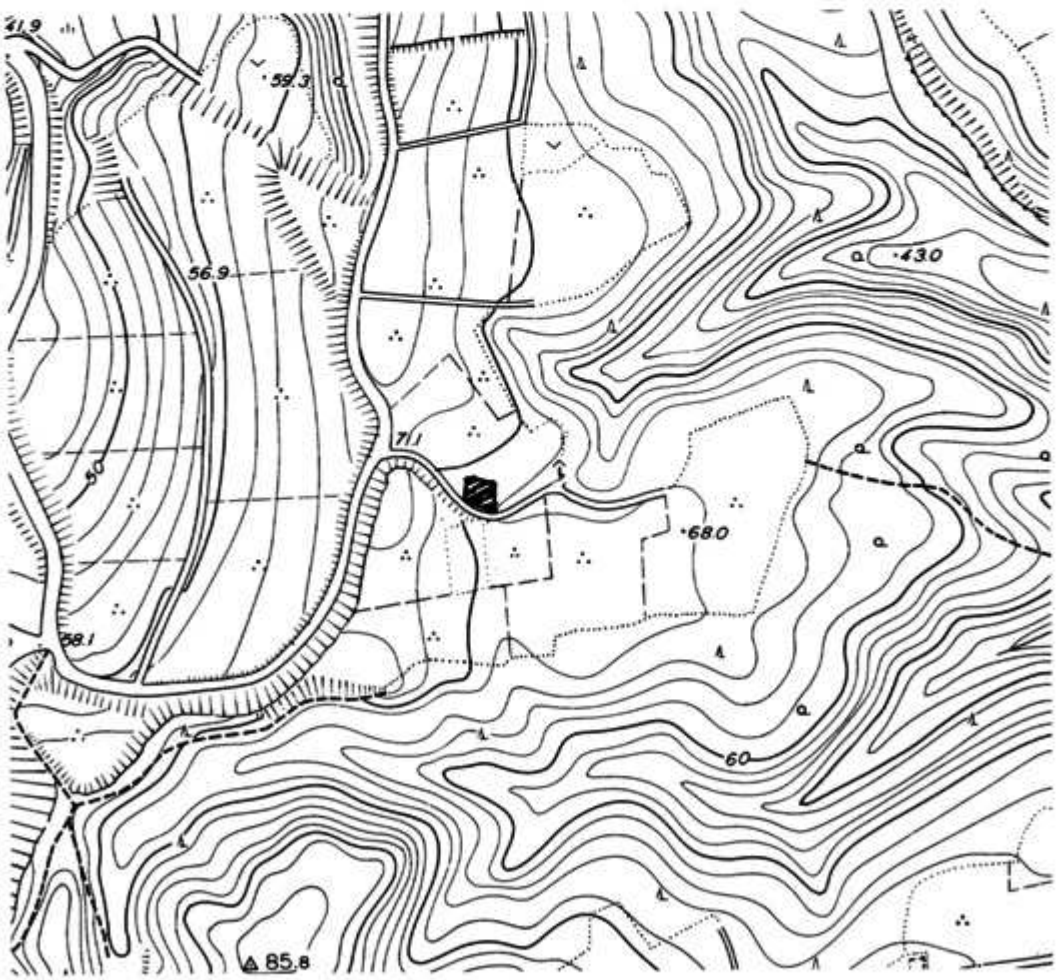
9．グリッド配置図で記した座標値は平面直角座標系Ⅷによる。遺構実測図における方位はこの座標北を表わす。

第Ⅰ章　はじめに

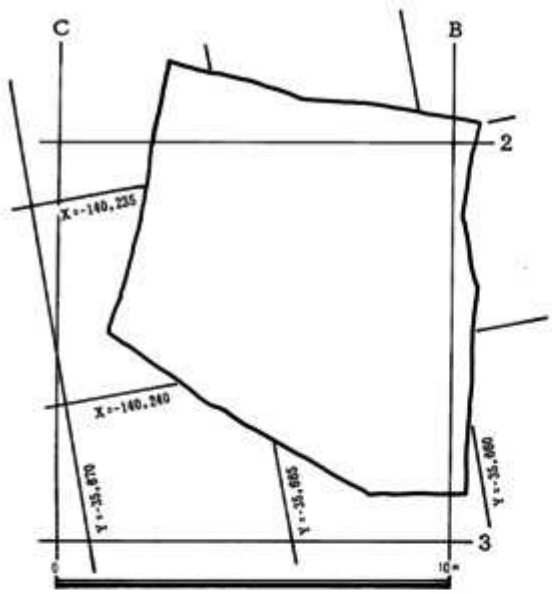
第１節　調査に至る経過

松ケ谷遺跡は、「菊川町遺跡地図」においてすでに登録されていた周知の遺跡である。今回の調査は、静岡県牧之原農業用水建設事務所による畑地帯総合土地改良事業の実施によるものである。通称畑総と呼ばれるこの事業は、畑地潅漑、排水、農道、農業用地造成などの事業を行ない、農業経営の近代化や合理化を推進し、地域農業の振興を目的としたものである。

この事業の一環で、当該地に農道の開設工事が計画された。これにより、開発計画内の松ケ谷遺跡の一部が破壊されることが明らかになった。平成８年に静岡県牧之原農業用水建設事務所から遺跡の有無の照会があり、これを受け、同所と菊川町教育委員会で協議し、工事着手前に発掘調査を実施して記録保存することで合意を得た。



第１図　位置図（縮尺1:2,500）



第2図　グリッド配置図

静岡県牧之原農業用水建設事務所は菊川町教育委員会に平成8年7月18日付けで発掘調査費用見積書の提出を依頼した。同年7月16日付けで文化庁長官あてに文化財保護法57条3項に係わる埋蔵文化財発掘調査の届け出を提出した。さらに発掘調査のための費用・期間・体制について協議し、菊川町教育委員会が調査主体となり、調査費用は開発側の同所で全額負担することになった。平成8年7月23日に事業者の静岡県牧之原農業用水建設事務所と菊川町教育委員会との間で、発掘調査の委託契約書が取り交わされた。

現地調査は、表土を機械で除去したのちに7月23日から人力による調査に入った。調査区には茶園の開墾や改植による撹乱が広く見られた。このため、この範囲を特定し、始めて遺構検出が可能となった。結局、7月26日におよそ1週間の現地調査を終了した。整理作業は平成9年2月28日に完了した。

第2節　調査の経過及び方法

経　過

事前作業

平成8年7月15・16・22日　バックフォーで調査区西半分の茶樹と表土の除去を行なう。

調査の開始

平成8年7月23日　器材を搬入し現地調査を開始する。調査区東部から人力による粗掘りと精査作業を数回行なう。

7月24日　土坑（ＳＫ－1）と小穴・柱穴（Ｐ－1・2）を検出し、掘削・計測と写真撮影を行なう。

7月25日～7月26日　配石遺構（配石－1～4）を計測し写真撮影を行なう。調査区西壁の土層断面を実測・写真撮影する。全体の完掘状態を撮影する。発掘器材の全てを撤収し、現地調査を完了する。

方　法（第2図）

発掘調査は、工事計画のうち100㎡を発掘の対象地とした。そしてこのうち、最も

遺物密度の濃厚な50㎡に重点を置いて本調査を行なった。調査方法は、バックフォーで茶樹と表土や耕作土を除去した後に、人力で掘削し、精査・写真撮影・測量の順に行なう。

測量用の基準杭を設け、発掘区内を10m方眼のグリッドに区切る。このグリッドを基準に発掘調査を進める。杭の東西列を東からA・B・Cラインとアルファベットで、南北列を北から1・2・3ラインと数字で呼び、その交点にあたる北東コーナー杭をグリッド名にした。たとえばB2区の具合である。グリッド基軸の方位はN－10°20′00″－Eで、グリッド杭は国家座標にプロットした。

現地での作図は、20分の1の縮尺を原則とし、必要に応じ10分の1の縮尺で行なった。また、遺物包含層出土遺物は極力出土位置を計測し、後日室内でドットによる作図を行なった。

標高測量は、発掘区内にBM（68.355m）を設定し基準点とした。調査に伴う写真撮影には、6×7㎝判カメラ（白黒フィルム）と2台の35㎜判カメラ（白黒フィルムとカラーリバーサルフィルム）を使用した。撮影は遺構を清掃したのち、高所作業車で上空から行った。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

松ケ谷遺跡は、東名高速道路菊川インターチェンジから東南東へ2㎞に位置する。神尾公民館、神尾神社や正光寺の北 約0.4㎞に所在する。通称「神尾原」といわれる河岸段丘上にあり標高64mである（第1・3図）。段丘上最も高い場所の北東に位置し、北東から入る谷地形の西端にあたる。この段丘は東にある牧之原台地から南南西方向に張り出したもので旧菊川の河川敷が隆起したものと考えられる。眼下には、西は小出川が菊川に並行して南流し、谷地形を呈する。段丘の南裾をかすめるように北東から南西にかけて牛渕川が南西に流れ、段丘の南には東西に細長い神尾の沖積平野が広がる。さらに南に別の丘陵が東から西に伸びこの谷地形を挟んでいることによる。

付近は段丘斜面やそれに直交して険しい斜面を呈する小谷に山林を残すほかは、尾根筋を中心に開墾され一面茶畑が広がる。

今回の調査地点もこうした茶畑の一画にあたる。現在、人家の大部分はこの段丘が沖積平野に埋没する裾あたりに密集する。神尾の集落がそれである。

段丘付近を中心に遺跡分布を概観するとつぎのようになる。ヒトの営みが行なわれた場所が概ね時代ごとに変遷している（第3図・第1表）。

縄文時代においては、この段丘上に集落が密集している。1松ケ谷遺跡、2神尾原遺跡が連なる。両遺跡では、過去に縄文時代の土器や石器が表面採取され、その存在

第3図　遺跡の位置と周辺遺跡（縮尺1:10,000）

番号	遺跡名	時代	位置	備考	番号	遺跡名	時代	位置	備考
1	松ヶ谷遺跡	縄文	神尾		5	芝原遺跡	古墳	神尾	
2	神尾原遺跡	〃	〃		6	大平遺跡	〃	〃	
3	段原遺跡	弥生～江戸	牛崩		7	横地城遺跡	室町	東横地	昭和46年県指定 昭和62年度調査
4	里遺跡	〃	〃	昭和63年度調査					

第1表　周辺遺跡一覧表

が確認された。

弥生時代から江戸時代においては、沖積平野や低位の段丘上が主な遺跡分布地になる。3段原遺跡、4里遺跡がこれにあたる。

古墳時代では、5芝原遺跡、6大平遺跡などが見られる。

中世には、横地城を中心とした丘陵部に分布の中心がある。丘陵上は7横地城遺跡、が見られる。7の横地城はその代表的な遺跡で室町時代に築造された連郭式の山城である。文明8年に今川義忠により落城されるまで横地氏が君臨した居城である。中世の貴重な資料といえる。

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　層　位（第4図）

基本層位は3層に識別できた。Ⅰ層は表土で現代の耕作土である。層厚は25～55cmである。径0.6～1㎝の黄色粘質土ブロックを含み、茶園の開墾や改植の痕跡と思われる。

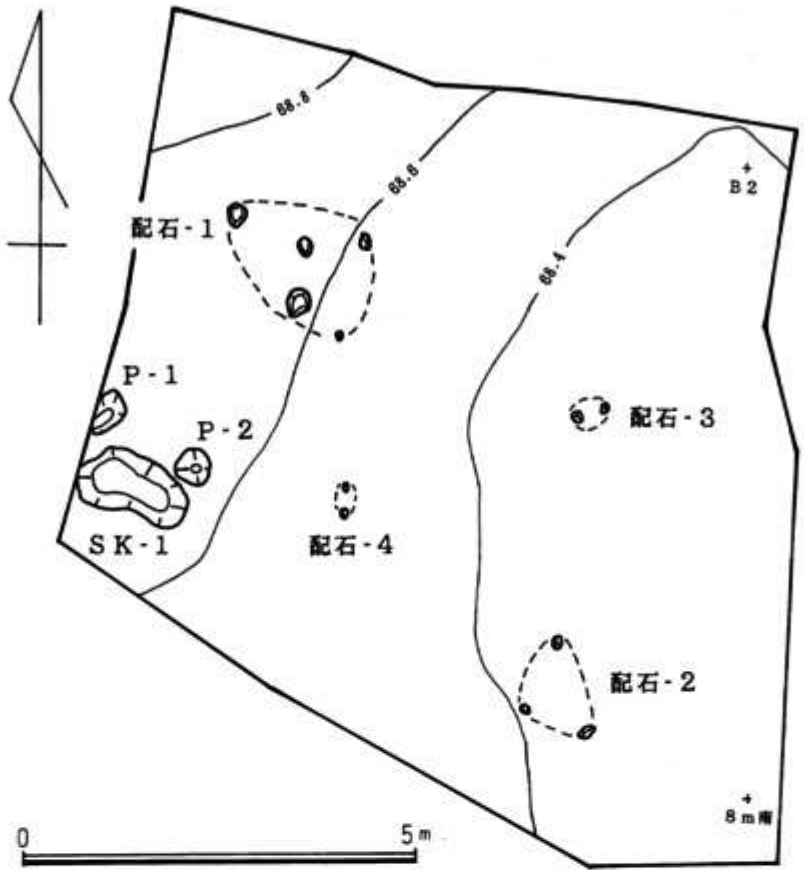
Ⅱ層は風成堆積のローム層と思われる。径3～5㎝の赤化した破礫を少量、径0.1～0.3cmの炭化物粒を微量含む。層厚は23～51cmである。上面は北から南になだらかに下降する。東西は東に緩やかに下降する。北東から入り込む深い谷地形の西端にあり、本層の堆積は、このいく分浅い谷地形をなす地形条件にあったものと思われる。今回出土した遺物や配石遺構は、全て本層に包含していた。茶樹の根はほとんど及んでいない。

Ⅲ層は赤褐色を帯びた土層である。礫をほとんど含まないよく締まった硬い層である。形成要因は定かでない。本層上面が今回の遺構確認面で、全般に遺構はⅢ層を掘り込む落ち込みとして確認された。よって本層が遺構基盤層（地山）であると判断された。層厚は本層上面から2㎝程度下まで掘削し確認するに留めた。

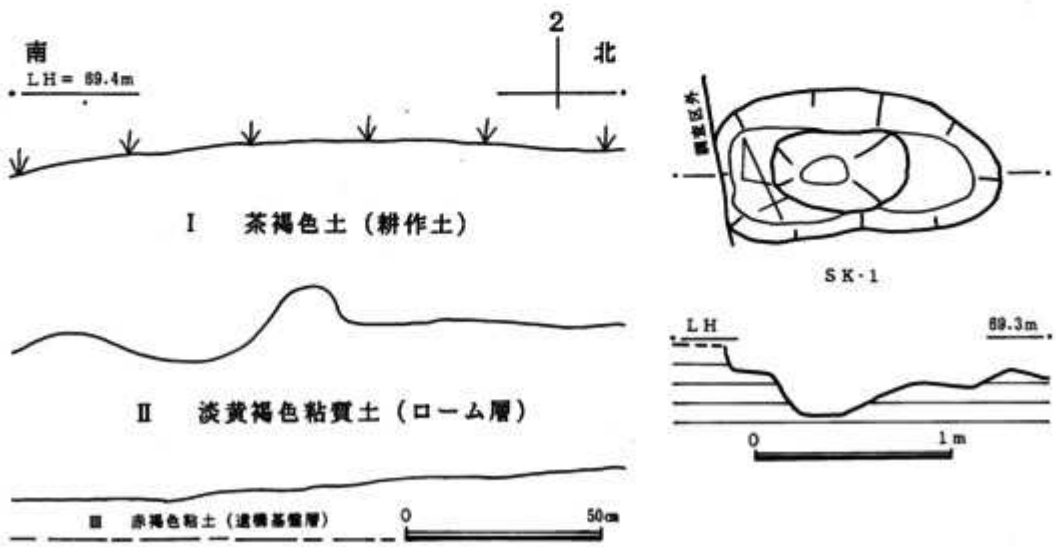
第2節　遺　構（第5図）

検出された遺構は、配石遺構4基、土坑（ＳＫ）1基、柱穴・小穴（ピット）2基である。開墾や茶園改植による撹乱を受け、遺存状況はよくない。遺物は少なく、時代は遺構に伴出した少数の遺物と遺構埋土の特徴、そして周辺にある遺構との関連から推し量った。付近の遺物包含層出土の土器型式から、時代は縄文時代中期もしくは弥生時代中期の遺構と思われる。

検出面の地形は、北西から南東になだらかに下降する。遺構は調査区の南4分の3に分布する。以下遺構別に記述する。



第5図　全体図



第4図　土層図（調査区西壁）とＳＫ－１実測図

ＳＫ－１（第４・５図・写真図版１下）　Ｂ２区南西隅に位置する。今回の調査で最も明瞭に検出された遺構である。平面形が不整長楕円形の落ち込みである。西端は調査区外のため明らかでないが、完掘された部分から推測すると平面形は不整長楕円形と思われる。規模は長径143cm、短径73cm、検出面からの深さ底で25cm、中段で22cmである。掘り方は法面の途中に中段をもつ。底の形態は楕円形を呈し、規模は長径25cm、短径14cmである。埋土は黄褐色土１層で径0.5～2.5cm大の赤化した破礫を少量含む。自然礫は含まないが、径0.1～0.3cmの炭化物と径0.1cmの焼土を微量含む。一方壁面には熱による赤化や炭化物の付着は見られなかった。

石器１点を伴ったが、遺構の年代は定かでない（第６図－３・第２表・写真図版２下)。

配石遺構

いずれもⅢ層上面にほぼ接地して検出された。構成礫は互いに接合しなかった。礫の大きさによる内訳は、拳大または拳２個大が９割以上を占め、人頭大以上のものは２点に過ぎない。赤化は、配石－２で最大の礫１点と配石－３の東の礫１点の計２点に見られた。また割れた面をもつ破砕礫はともに泥岩で、配石－１の北東の１点と配石－２の南西の１点の計２点に見られた。赤化と風化の進行により正確な石材判別は困難であったが、構成割合は砂岩がほとんどを占め、ついで花崗岩、泥岩の順で少なくなる。段丘礫層における構成割合との対比を行なっていないが、石材に対する意図的な選択が見受けられる。

石器としての使用をうかがわせる礫２点が見られる。石皿とおぼしき砂岩製の礫２点が配石－１で認められた。人頭２個大の円礫で上面に平滑な摩滅面を持つ。

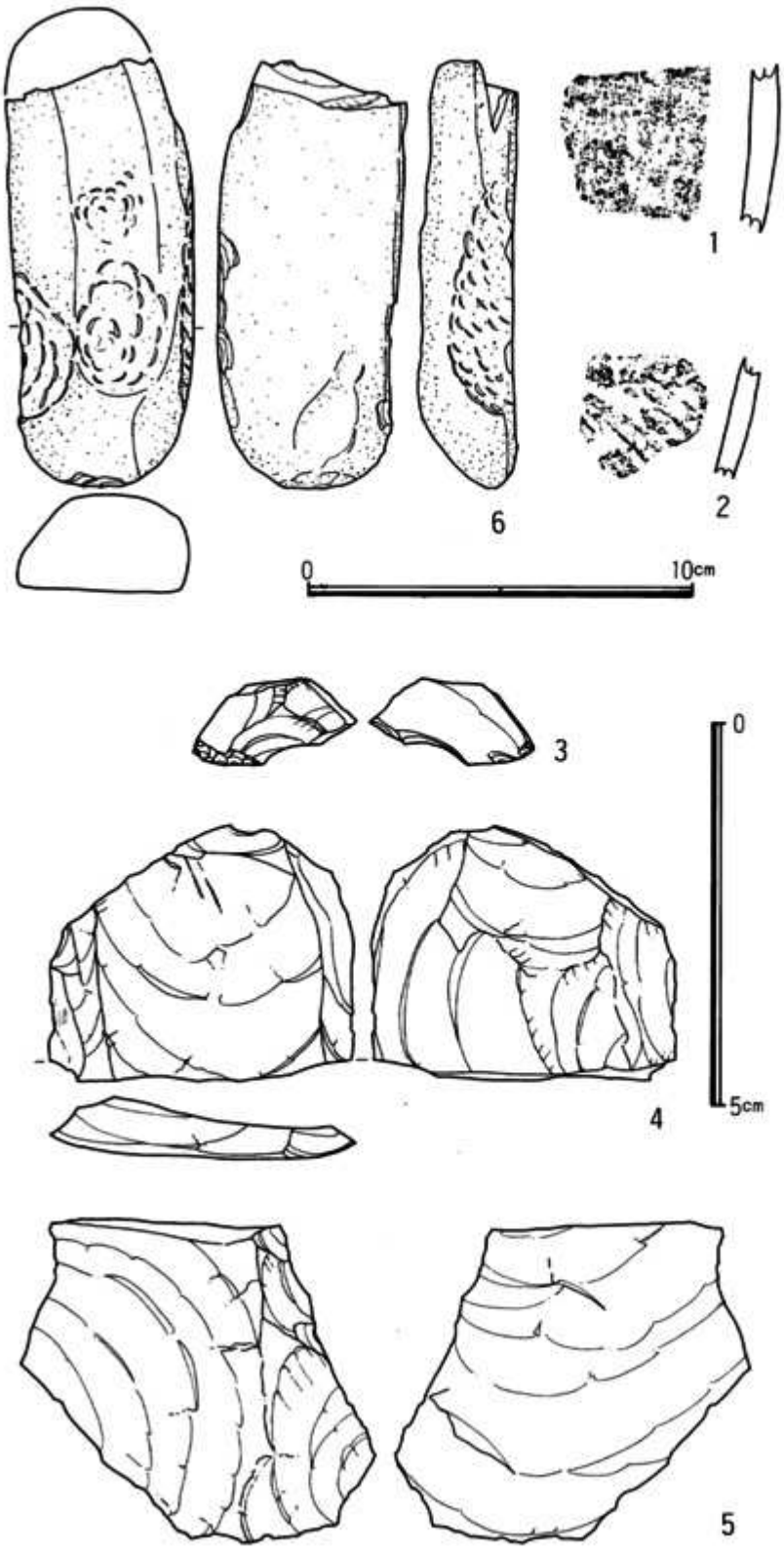
配石－１（第５図、写真図版１上・２上）　Ｂ２区北西に位置し、ＳＫ－１やＰ－１・２の北に位置する。平面形は楕円形の配置である。規模は東西223cm、南北135cm、である。構成礫は５点である。

配石－２（第５図）　Ｂ２区西南にあり、平面形が三角形の配置である。規模は南北115cm、東西98cmである。構成礫は３点である。

配石－３（第５図）　Ｂ２区北東にあり、配石－２の北に位置する。平面形は点状である。形態は２点の礫が向き合う。規模は東西26cm、南北12cmである。

配石－４（第５図）　Ｂ２区中央部、ＳＫ－１と配石－１と配石－２の中央に位置する。平面形は２点の構成礫からなる点状の配置である。規模は南北41cm、東西14cmである。

小穴・柱穴（第５図、写真図版１）　全部で２基検出された。調査区南西隅に分布し、ＳＫ－１の北側に位置する。２基だけでピットの規則的な並びは見出せない。いずれも埋土は黄褐色土で自然礫を含まない。径0.1～0.3cmの炭化物を微量含む。Ｐ－１・２ともに遺物を伴わず遺構の年代は定かでないが、ＳＫ－１と同時期、縄文時代



第6図　出土遺物（縄文土器、弥生土器、石器）

中期と推測される。

第3節　遺　物

ポリコンテナに半箱分の遺物が出土した。縄文時代中期と弥生時代中期のものである。種類は石器、土器である。土器は主に縄文土器で、ついで弥生土器数点からなる。土器、石器の順で記述する。本遺跡出土の土器は、層位的な分類が不可能なため、文様的特徴と胎土の質に基づき型式ごとに分類した。以下、その特徴が判別可能なものを取り上げ、加えて編年・系統について述べる。

縄文土器（第6図－1、第2表、写真図版2下）

7点ほど出土した。時期は中期後葉で器種は不明である。厚手の器壁で色調は暗茶褐色である。胎土に白色粒子を多数含む。

番号	器種	出土地点		厚さ	部位	時期	登録No.	備考
		遺構	地区					
1	縄文土器		B－2	7.5	体部	縄文中期	13	
2	弥生土器		B－2	6.0	体部	弥生中期	17	

	器種	出土地点		法量（cm）			重量（g）	石材	登録No.	備考
		遺構	地区	長さ	幅	厚さ				
3	RF	SK－1	B－2	1.1	2.2	0.6	1.4	シルト岩	12	縄文か
4	剥片		B－2	3.4	4.0	0.8	16.0	〃	15	〃
5	〃		B－2	4.2	4.7	1.0	14.5	砂岩	18	〃
6	敲石		B－2	(11.1)	5.0	2.7	225.6	〃	21	〃

第2表　遺物計測表（縄文土器、弥生土器、石器）

中部山岳地帯の系譜といわれる曽利系の土器である。

弥生土器（第6図－2、第2表、写真図版2下）

4点出土した。外面に斜位の条痕が見られる褐色の土器である。弥生時代中期の丸子式土器と考えられる。

石　　器（第6図－3～4、第2表、写真図版2下）

石器組成は加工痕ある剥片1点、剥片2点、敲石1点の計4点である。うちRF1点は遺構に伴出し、その他は遺物包含層から出土した。

石材は砂岩とシルト岩が利用されている。3・4は灰白色を呈する。3は下端に加工が見られる。4の下端は折れと考えられる。5は灰色を呈し、打面を有する。6は先端を欠損している細長い敲石である。敲打痕は正面と左・右側面にあばた状の凹みとして見られる。P－1の中心から北東50cmの地点で出土した。なお、配石の中には石皿を思わせる重量感のある浅い皿状の凹みをもつ礫が2点見られたが、これらは石器の認定から除外した。

第Ⅵ章　ま　と　め

今回の調査成果をまとめるとつぎのとおりである。

○縄文時代中期と弥生時代中期からなる複合遺跡であることが確認された。

○縄文時代中期のものと思われる土坑1基と小穴2基が認められた。この時期には段丘上で集落が営まれていたことを示す資料として評価されよう。周辺の当時の生活空間を考える一資料を提供した。

○該期の遺物が出土したが、落ち込み等の明確な遺構に伴うものは少なかった。これらは、付近が浅い谷地形であったため埋没し遺存したと考えられる。

なお調査と本稿をまとめるにあたり、下記の方々から種々の御教示と協力を戴いた。

末尾ながらここに記して御礼申し上げたい。
加藤賢二　黒坪一樹　黒坪　京　鈴木一有　松井一明

参考文献

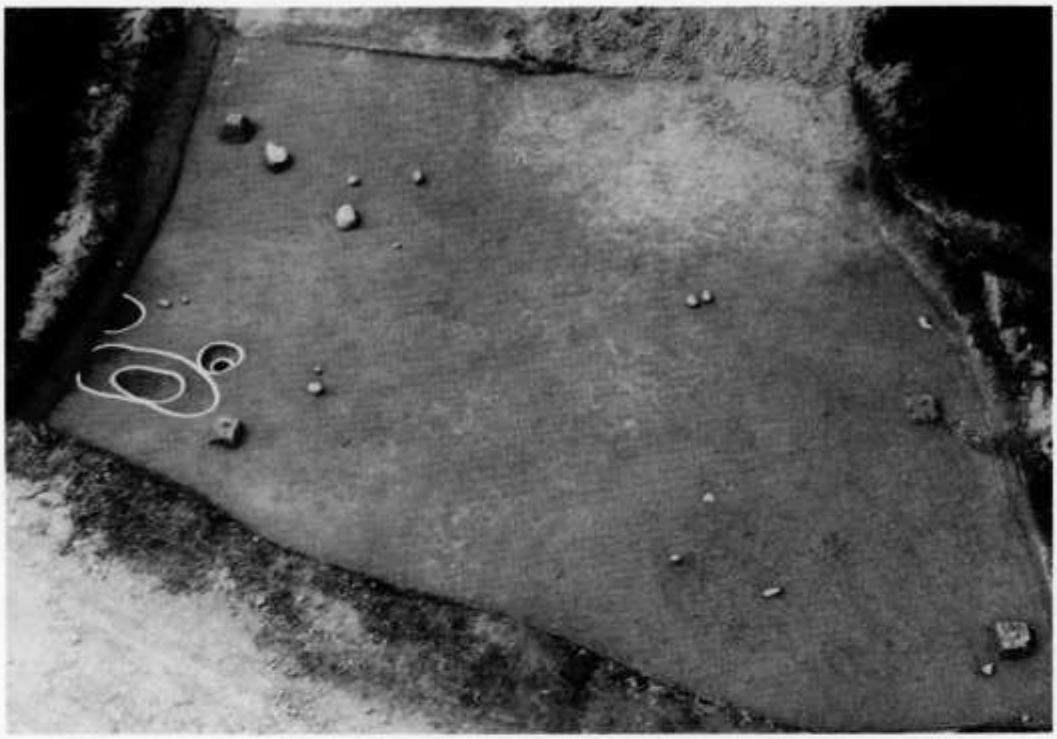
菊川町教育委員会　1996　『猿田谷遺跡Ⅱ』菊川町埋蔵文化財報告書第37集
〃　1994　『善福寺遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第29集
〃　1994　『菊川町史跡・遺跡地図』
佐藤　由紀男　1996　「第Ⅲ部 編年編 遠江・駿河(中期)」『ＹＡＹ！(やいっ)』

松ヶ谷遺跡発掘調査報告書

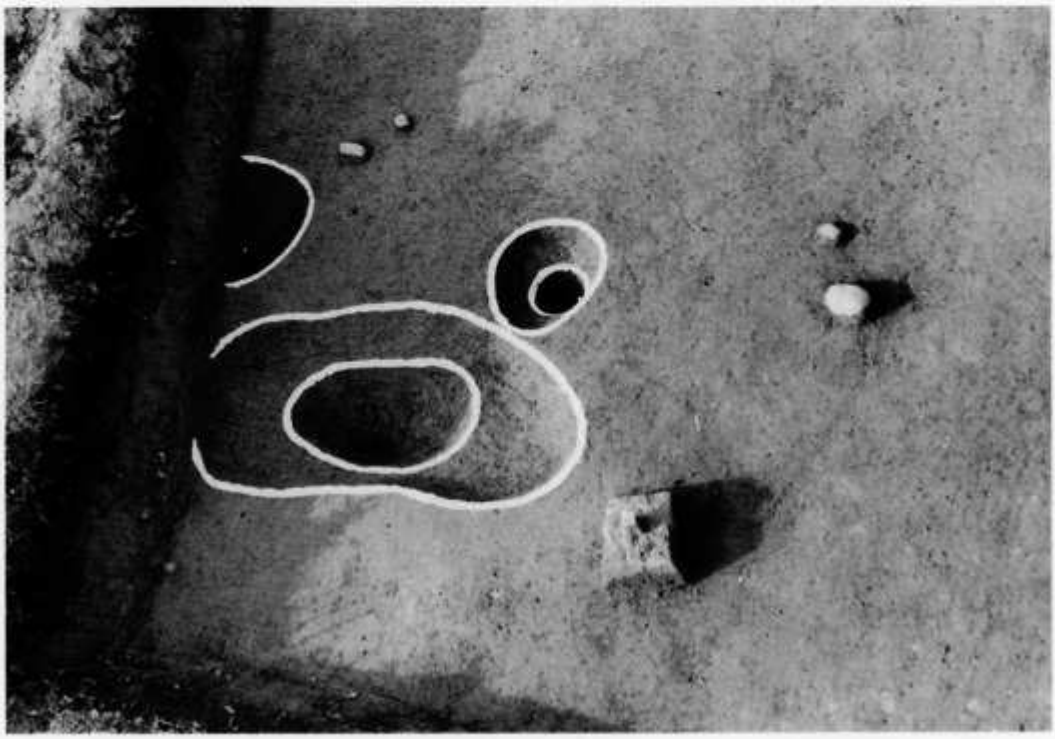
1997年２月24日　発行

編　集　静岡県菊川町教育委員会
発　行　静岡県菊川町教育委員会
印　刷　株式会社　開明堂

写 真 図 版



完掘状態（南から）



手前：ＳＫ－１完掘、奥：Ｐ－１・２（南から）

配石－1（南から）

出土遺物（縄文土器、弥生土器、石器）